

# 多摩川流域の山ノ神と水神社の分布およびオッカドドウシンと粟穂稗穂

木俣 美樹男

## Distribution of yamanokami and suijin shrines, and okkado-doshin and abo-hebo in Tamagawa valley

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

日本の農耕文化複合は歴史的にみると多層構造をなしている。日本独自の土器による編年によれば、無土器文化、縄文文化および弥生文化を基層にしながら、現代文明へとつながってきた。狩猟採集から前農耕の時代は長く続き、縄文文化後・晩期になって初期農耕、イモや雑穀が焼き畑で栽培され始めたようだ（佐々木1982）。縄文文化の晩期にはすでに水田稲作が日本に伝わり、本格化して弥生文化に移行していった。この過程は連続的、混合的であり、現在でも文化複合が多層構造をもっているのはこのためである。

山や森が多いこのくには畑作も稲作もともに重要である。イモ、雑穀、イネもほとんどの栽培植物は海外から伝播してきたので、水田稲作が畑作に対して優位であるということはない。この過程を検証するのに興味深い民間信仰と農耕儀礼を多摩川流域の事例において取り上げてみたい。

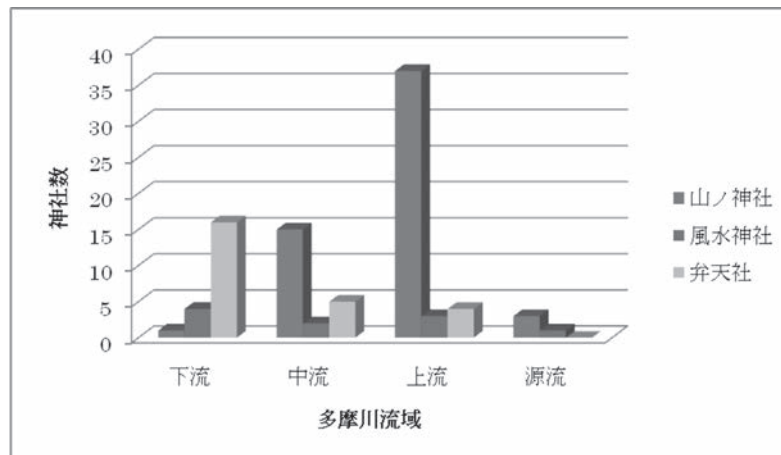
多摩川流域の市町村に存在する山ノ神社、風水神社および弁天社を文献から抜き出して、下

流、中流、上流および源流域に区分して図1に示した。山ノ神社は源流を含む上流域に圧倒的に多く、下流域には少ない。反対に弁天社は下流域に多く、上流域には少ない。風水神社は分布に大きな差がない。

山ノ神は杣、木挽き、炭焼きなど山で働く人々を守る神と言われている。これらの人々は山ノ神の日にオミキ（神酒）、オカラク（蕎麦団子）、メザシ、けんちん汁などをお供えする。水神は雨乞い、治水、水難事故防止を願う神である。図2に示した水神社のいわれは、本誌の和田（2011）の報告に詳しく書かれている。弁天（弁財天、弁天様）はインドの神サラスヴァティーであり、江戸時代に篤い信仰を集めた江の島の弁財天が多摩川下流の各地に勧請された。鎌倉の銭洗い弁財天の湧水でお金を洗うと、お金が増えると言われている。

山ノ神は暮らしを支えるカミであり、弁天は現世利益、金儲けの神ということで、山村と都市の暮らしの機能によく対応していると思われる（参考文献参照）。

図1. 多摩川流域における民間信仰の神社の分布



餅なし正月は三が日の雑煮に餅を入れない、食べない習俗を言うのであるが、現在でも関東地方、和歌山、瀬戸内海周辺に餅なし正月を行っている集落、一族や家族がある。ヤマイモやサトイモを儀礼食として尊重している地域は九州から東南北部地方に及んでいる。餅好きの日本人が餅なし正月三が日に餅の替りに食べるのは粘りのあるサトイモやナガイモ、あるいはそばやうどんである。雑煮に餅を入れるようになったのは室町時代であるので、それ以前はイモ正月としてイモ類が食されていたのであろう。イモ類の粘りを好むことが餅の好みにつながったのであろう（坪井1979）。また、群馬、埼玉、山梨および長野県境にはうどん正月が行われている。餅なし正月の主要な食物イモ、ソバ、コムギの全てが畑作物である。

餅は一般に穀物の糯性穀粒を精白後、蒸してから臼でついて作る。糯性デンプンをもつ品種がある穀物はイネ、アワ、キビ、モロコシ、オオムギ、ハトムギ、トウモロコシである。グレイン・アマランスでも糯性品種は発見され、最近、ヒエの糯性品種も育成されている。天皇家は皇居でイネとアワを自ら栽培して、新穀の収穫を祝う新嘗祭に両作物をお供えされておられるそうだ。



図2. 府中市の押立神社（水神社）

多摩川流域では、小正月にオッカドドウシン（門男）やアボ・ヘボ（粟穂・稗穂）をヌルデ（オッカドノキ、カツノキ）で作って、門前に飾る。門男は本誌の表紙を飾り、図3に示してある。図3の左の門男は上野原市西原にお住まいであった降矢静夫氏の作品で、男女一対の内の優美な女性像である。門男と言うので、男性像はいくつかの雑誌に掲載されたが、女性像は掲載されなかった。共に植物と人々の博物館に展示してある。図3の右は丹波山村にお住まい



図3. 左は上野原市西原の門男（これは女性）、右は丹波山村のカドンドウシン

表 1. 多摩川上流近接地域のカドンドウシンの特徴

	本神	顔立ち	対象	物日	供物	飾る場所	材料
丹波山村	カドンドウシン、 ドウシンサン		山の神に仕える山人が 正月の祝いに山を下っ てきた時の杖であり、 福が来たしるし	1月13日	アワボ、 ヘーボ		ヌルデ
保之瀬	2体とも男						
押垣外ほか	男女1対	怒った顔				門松の後、 物置、便所	ヌルデ、 イナワラ
鴨沢	デク(魔除け人形)、 ない						
小菅村	オッカドドウシン (御門道神)						ヌルデ
	男女1対	穏やかな顔					
上野原市西原	カドオトコ(門男)		百姓の姿、次男三男?		アーボ、 ヘーボ		ヌルデ
	男女1対				鎌、鋏、 俵神、飯。 繭玉：イ ネ、アワ、 キビ粉で 団子を作る		竹の髻、葛 の腰紐。ツ ゲ、山桑、 ナラ、ウメ
奥多摩町	門の棒	へのへの もへじ	畑作神様の御影を描く	1月13日	繭玉、粟 穂、稗穂、 たわら(恵 比寿様へ)	松飾の跡	
	男女1対						
桧原村					アボヒボ を7本竹 にさして、 五穀豊穡 を祈る。 夷様に米 俵として 5本積み 重ねて供 える。		

の岡部良雄さんの作品で、魔除けのために怖い顔をしている。この作品は植物と人々の博物館がお願いをして、講習会をしていただいた時のものである。

表1に示したように、村々でその作り方やいわれが若干異なっている。オッカドドウシンは鎌と鋤、粟穂と稗穂をもっている。上野原市西原の門男は穏やかな顔をして、門から玄関に向けて男女一対で立てられ、山ノ神の使いとして山人が秋の収穫を予祝するものとして来訪するのだと理解できる。他方、丹波山村のドウシンサンは怒った顔をしており、魔除けの意味があ

るそうだ。源流部の村々では同時に俵神もヌルデで作ってお供えしている。この俵神は収穫された穀物を象徴している。

しかしながら、中流域に来ると、カドンドウシンは作らずに、アボ・ヒボだけを作り、次第に簡素になる。さらに下流域ではこれさえも作られていない。したがって、カドンドウシンは山ノ神の眷族であって、畑作のカミに連なるようだ。とても魅力的な農耕儀礼であるので、これからも雑穀栽培と共に継承されていくことを願っている。

---

参考文献：

- ・佐々木高明 1982 照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ、日本放送出版協会
- ・増補改定 青梅市史 下巻
- ・武蔵村山市史 民俗編
- ・福生市史 資料編 民俗上
- ・日出町文化財専門委員会 日出町の年中行事
- ・多摩市 多摩市の民俗（信仰・年中行事） など